

市の食育に
関する現状

市の食育に関する現状

1 「食育に関する調査」について

この計画の策定に際し、市民の皆さんの食育に関する現状の把握と、それに対する施策検討の参考とするため、「さいたま市食育に関する調査」の調査票を、平成 19 年 6 月 20 日現在でさいたま市に在住する、0 歳以上の市民 4,000 人を、住民基本台帳の中から無作為抽出して、郵送により調査票を送付、回収しました。

なお、16 歳未満の方には、保護者の方にその方のごことについて回答(記載)してもらおうようお願いしました。

(1) 調査対象及び方法

調査地域：さいたま市全域

調査対象：市内在住の 0 歳以上の男女各 2,000 人、計 4,000 人

抽出方法：0 歳～5 歳、6 歳～15 歳、16 歳～24 歳、25 歳～39 歳、40 歳～64 歳、65 歳以上、の 6 つの階層に分け、住民基本台帳により無作為抽出。

調査方法：郵送による配布、回収

調査期間：平成 19 年 7 月初旬から同月 20 日まで

回収状況

	配布数(票)	有効回収数(票)	有効回収率(票)
乳幼児期 0 歳～5 歳	666	317	47.6%
学 齡 期 6 歳～15 歳	666	329	49.4%
青 年 期 16 歳～24 歳	668	219	32.8%
成 人 期 25 歳～39 歳	668	276	41.3%
壮 年 期 40 歳～64 歳	666	341	51.2%
高 齢 期 65 歳以上	666	394	59.2%
合 計	4,000	1,888	47.2%

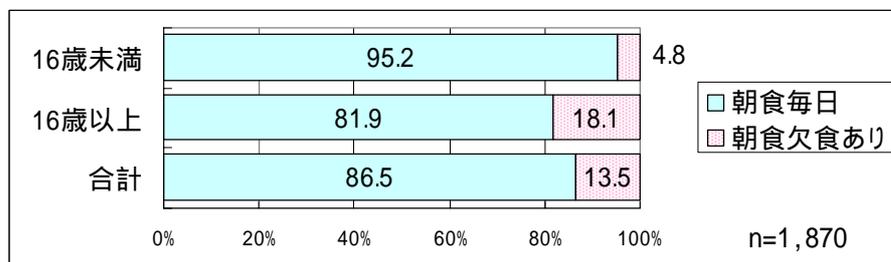
2 調査内容と結果

調査結果については、別に報告書を作成していますが、本計画の目標・指標に関する現況値などは次のとおりです。(各項目で「無回答」は除いて集計しています。)

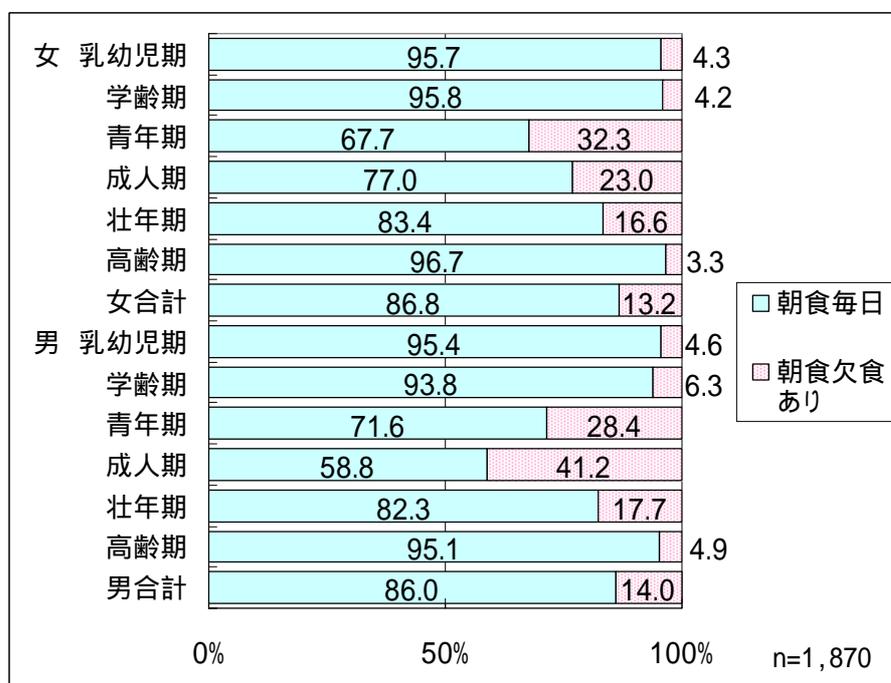
目標1 「三食しっかり」食べる

指標1 朝食を食べている人が増える

A. ほとんど毎日朝食を食べている人の割合



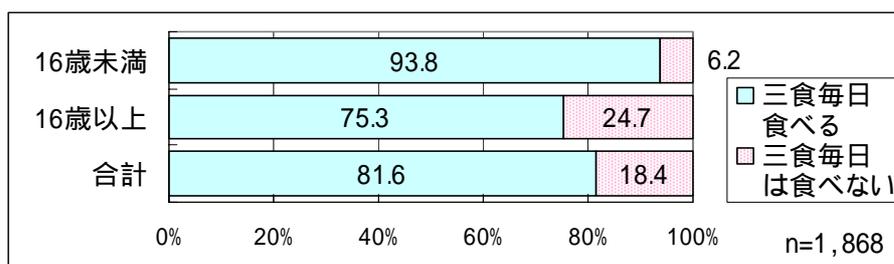
16歳未満は95.2%、16歳以上は81.9%の人が、ほとんど毎日朝食を食べています。



性・ライフステージ別では、女性の青年期・成人期、男性の青年期・成人期の割合が低くなっています。

指標2 毎日、三食しっかり食べている人が増える

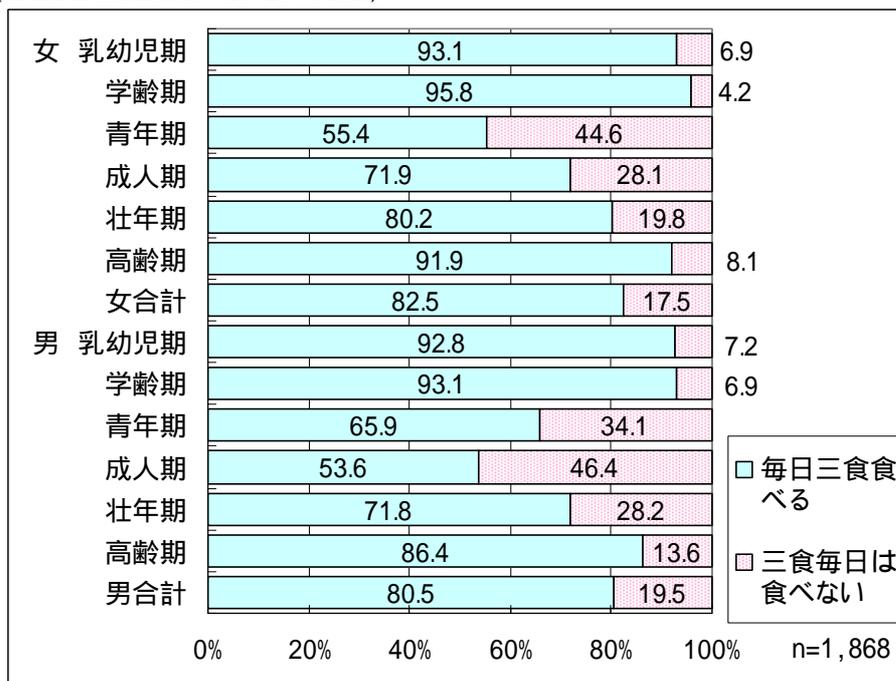
B. ほとんど毎日三食食べている人の割合



16歳未満は93.8%、16歳以上は75.3%の人が、ほとんど毎日三食を食べています。

市の食育に関する現状

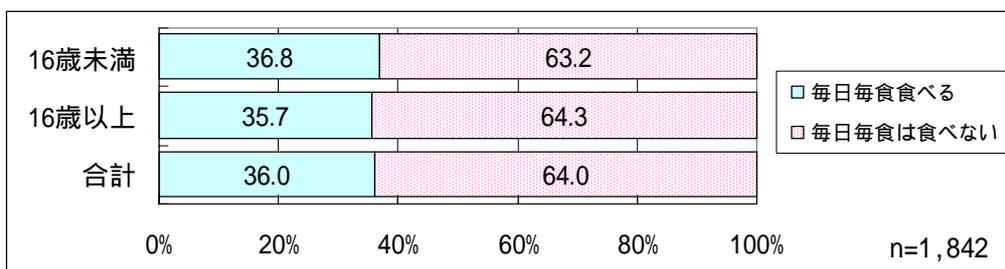
(ほとんど毎日三食食べている人の割合)



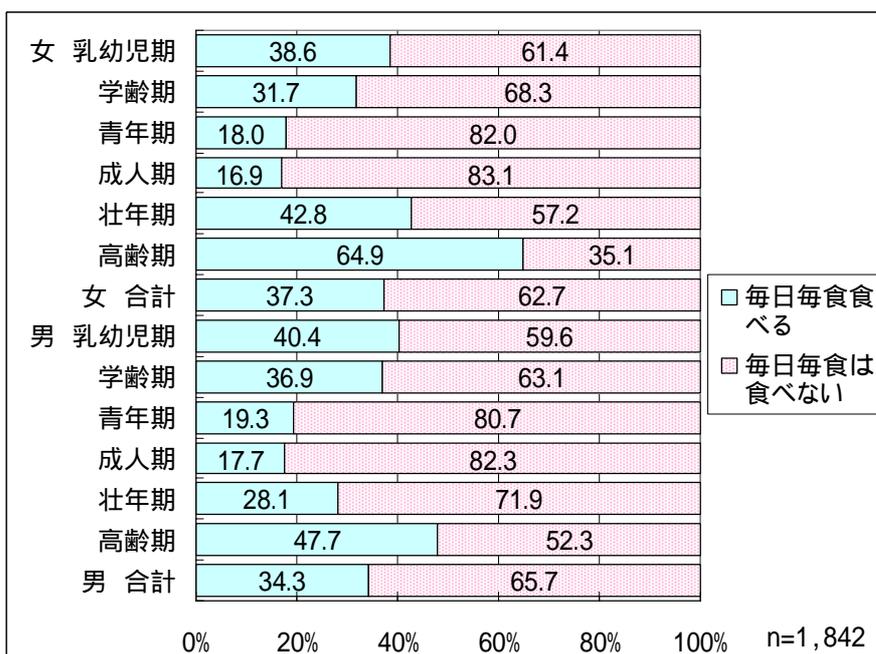
性・ライフステージ別では、女性の青年期・成人期、男性の青年期・成人期・壮年期の割合が低くなっています。

指標3 毎日、三食野菜を食べている人が増える

C. ほとんど毎日、三食野菜を食べている人の割合



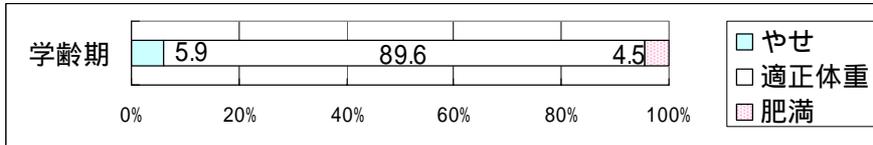
16歳未満は36.8%、16歳以上は35.7%の人が毎日三食野菜を食べています。



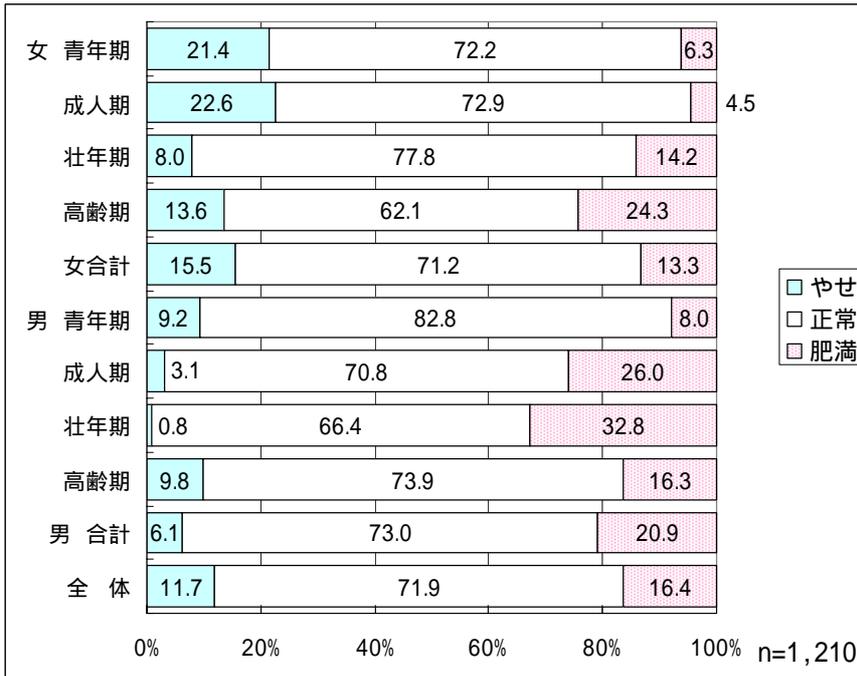
性・ライフステージ別では、女性の学齢期・青年期・成人期、男性の青年期・成人期・壮年期の割合が低くなっています。

指標 4 適正体重を維持している人が増える（肥満とやせの人が減る）

D-1. 肥満・やせの人の割合（学齢期・学校保健の基準による）



D-2. 肥満・やせの人の割合（16歳以上・BMIの基準による）



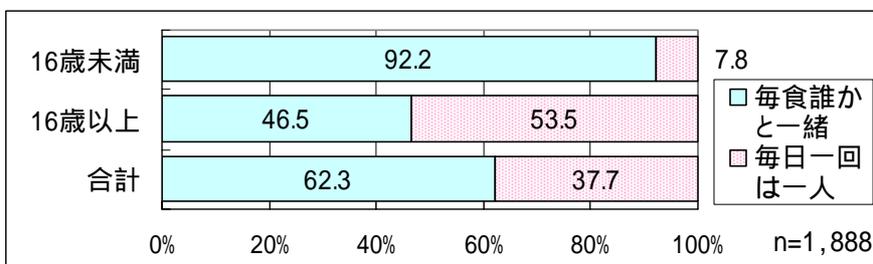
16歳以上のBMIでみた体格では、「標準」が89.6%を占め、「肥満」が4.5%、「やせ」が5.9%となっています。

性・ライフステージ別では、女性の青年期・成人期にやせが多く、女性の高齢期、男性の成人期・壮年期に肥満が多くなっています。

目標 2 「いっしょに楽しく」食べる

指標 5 一日一食以上、家族や仲間と一緒に食事をしている人が増える

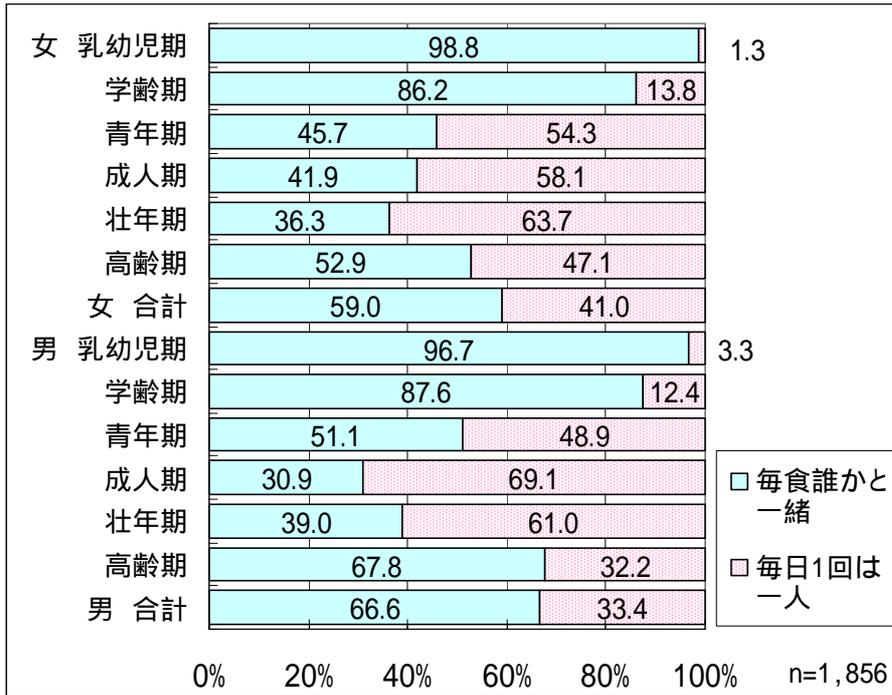
E. 毎日毎食家族や仲間と一緒に食事している人



16歳未満は92.2%、16歳以上は46.5%の人が毎食家族や仲間と一緒に食べています。

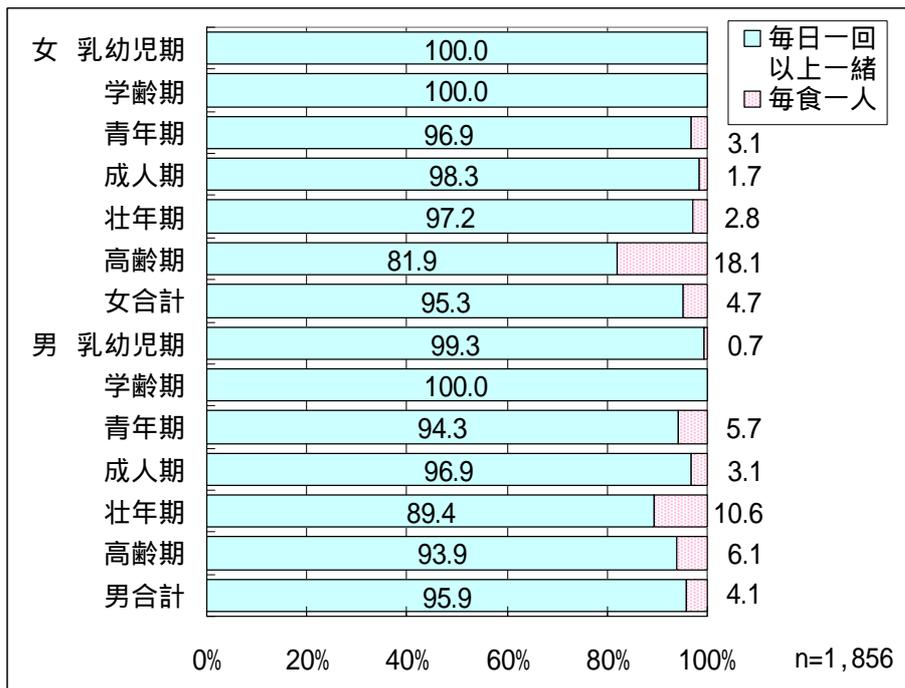
市の食育に関する現状

(毎日毎食家族や仲間と一緒に食事している人)



性・ライフステージ別では、女性の青年期・成人期・壮年期、男性の青年期・成人期・壮年期の割合が低くなっています。

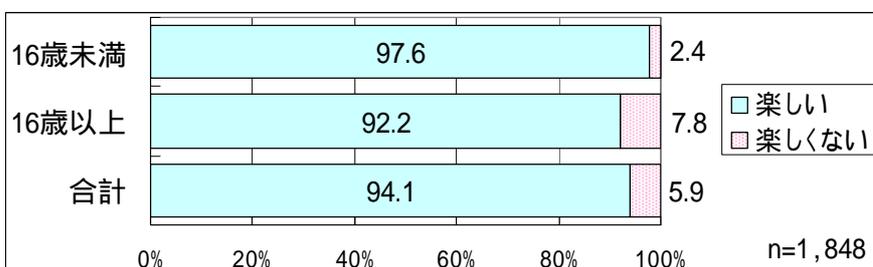
<参考：一日一食は家族や仲間と一緒に食事をしている人の割合>



一日一食は家族や仲間と一緒に食事をしている人の割合は、全ての世代において8割を超えています。

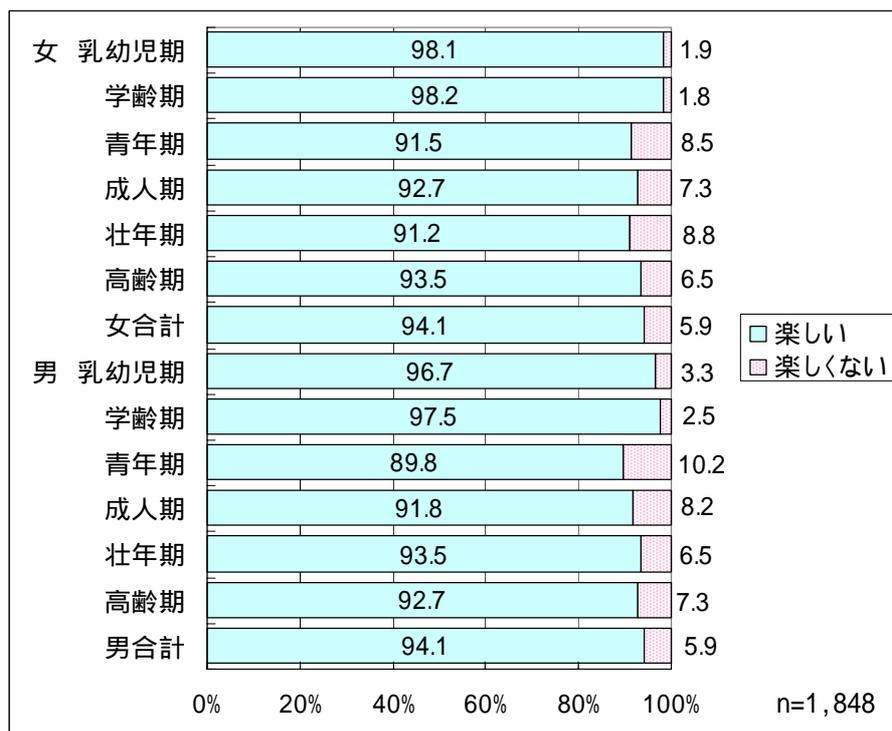
指標6 楽しく食事をする人が増える

F. 楽しく食事をする人の割合



楽しく食事をする人の割合は16歳未満で97.6%、16歳以上で92.2%です。

(楽しく食事をする人)

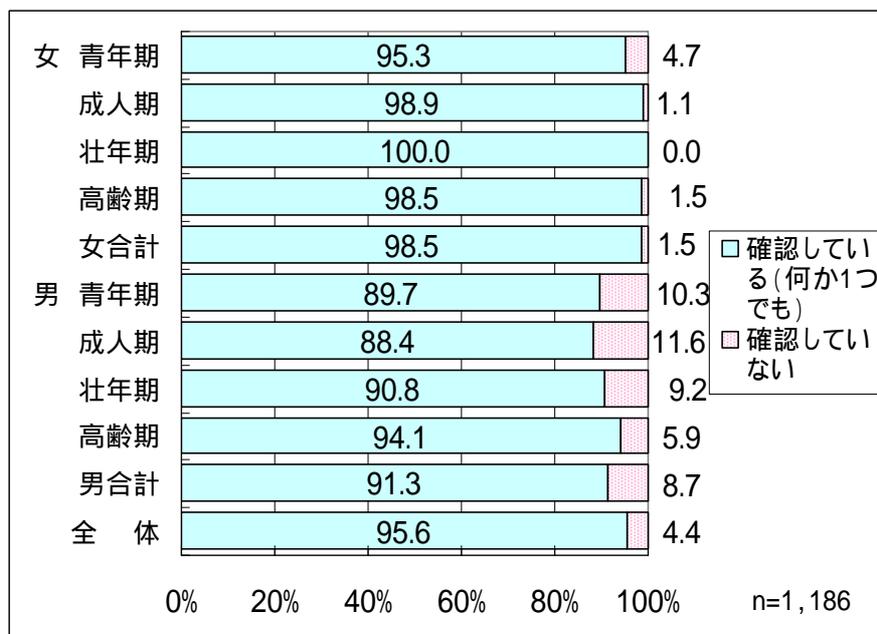


性・ライフステージ別に見ると、楽しく食事をする人は全ての世代において 8 割を超えています。

目標 3 「確かな目をもって」食べる

指標 7 食品表示を見て食品を購入する人が増える

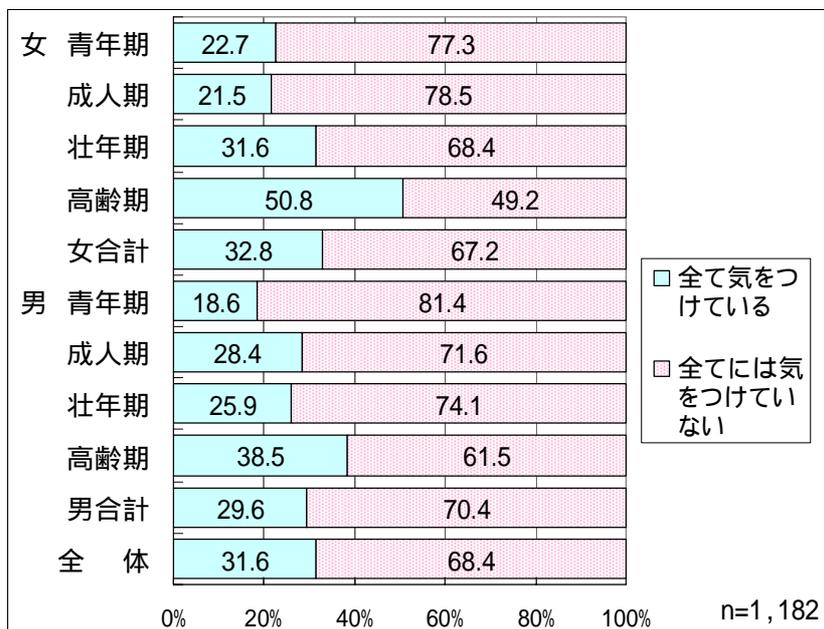
G. 食品表示を何かひとつでも確認している人の割合 (16 歳以上)



食品表示を何かひとつでも確認している人の割合は、全体で 95.6%であり、性・ライフステージ別に見ると、全ての世代において 8 割を超えていました。

指標 8 食中毒を防ぐ方法をとっている人が増える

H. 食中毒予防のため、食品の保存方法、調理方法、調理器具の洗浄・消毒方法の全てに「気をつけている」と答えた人の割合（16歳以上）



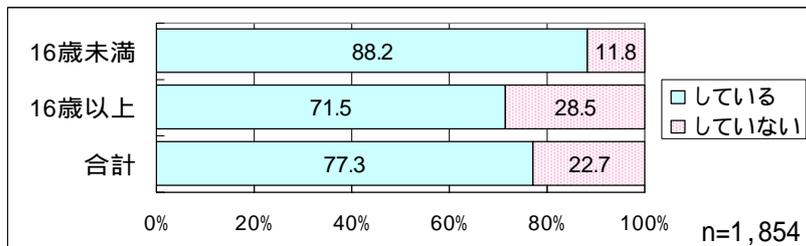
食中毒予防のため、食品の保存方法、調理方法、調理器具の洗浄・消毒方法の全てに「気をつけている」と答えた人の割合は、全体の31.6%です。

性・ライフステージ別では、女性の青年期・成人期、男性の青年期・成人期・壮年期で割合が低くなっています。

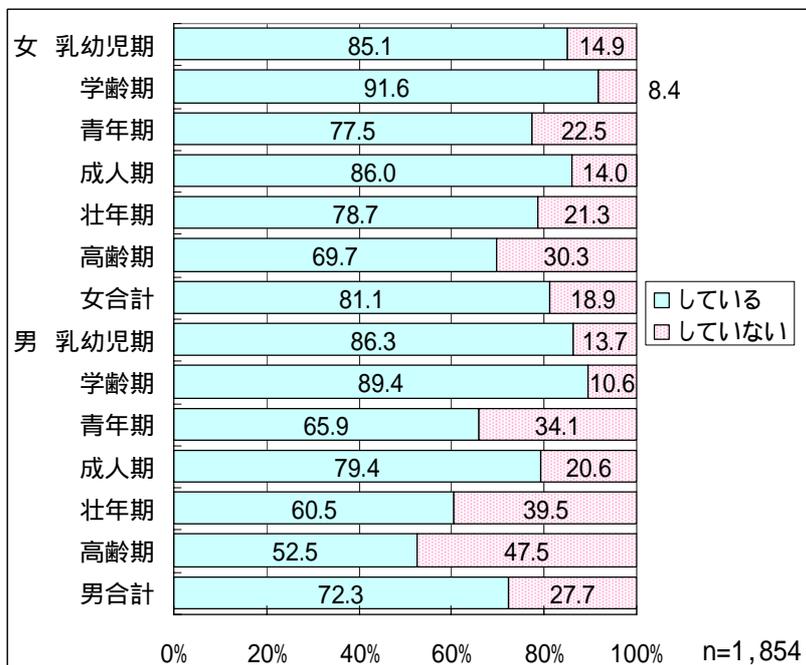
目標 4 「まごころに感謝して」食べる

指標 10 食事のあいさつを習慣としている人が増える

I. 「いただきます」のあいさつをする人の割合



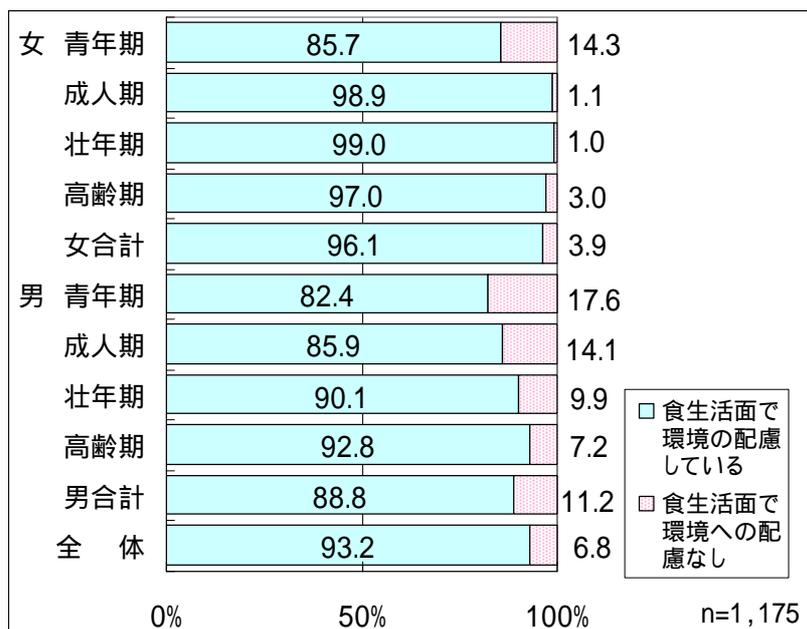
「いただきます」のあいさつをしている人の割合は、16歳未満で88.2%、16歳以上で71.5%です。



ライフステージ別では、女性の高齢期、男性の青年期・壮年期・高齢期で割合が低くなっています。

指標 11 環境に配慮した食生活をしている人が増える

J. 環境に何らかの配慮をした食生活をしている人の割合（16歳以上）



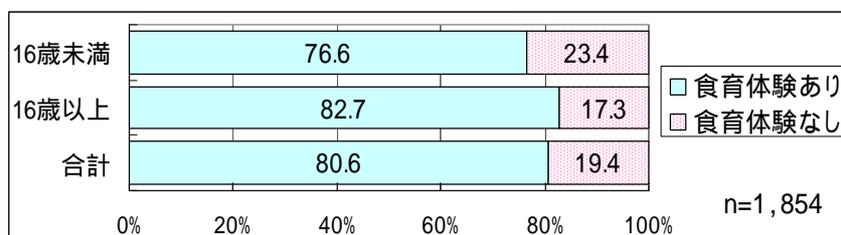
環境に何らかの配慮をした食生活をしている人の割合は、全体で 93.2%です。

性・ライフステージ別では、女性の青年期、男性の青年期・成人期で割合が低くなっています。

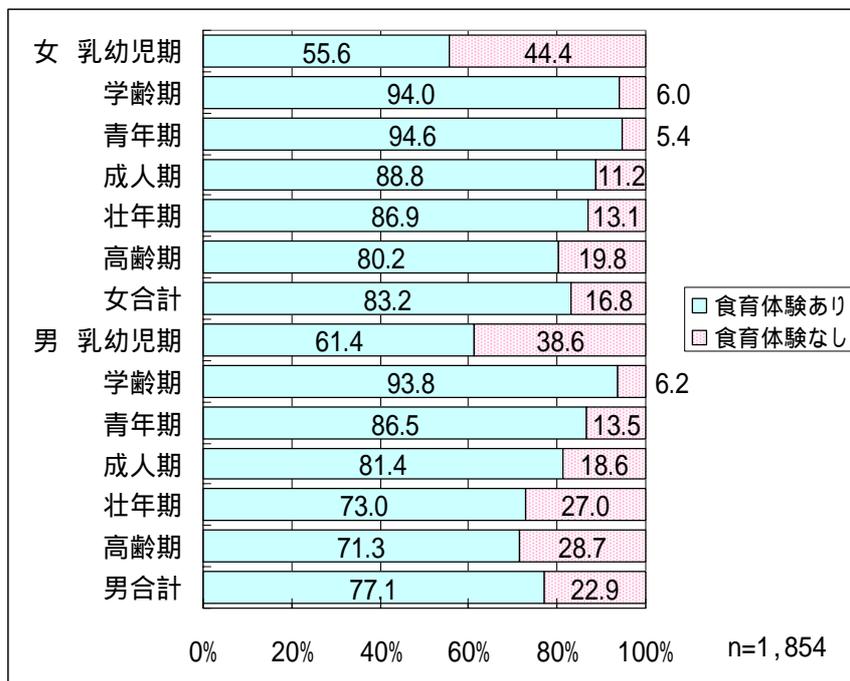
目標 5 「食文化や地の物を伝え」食べる

指標 13 農業体験、生産者との交流の機会をもっている人が増える

K. 何か1つでも農酪漁業など食育に関する体験をしている人の割合



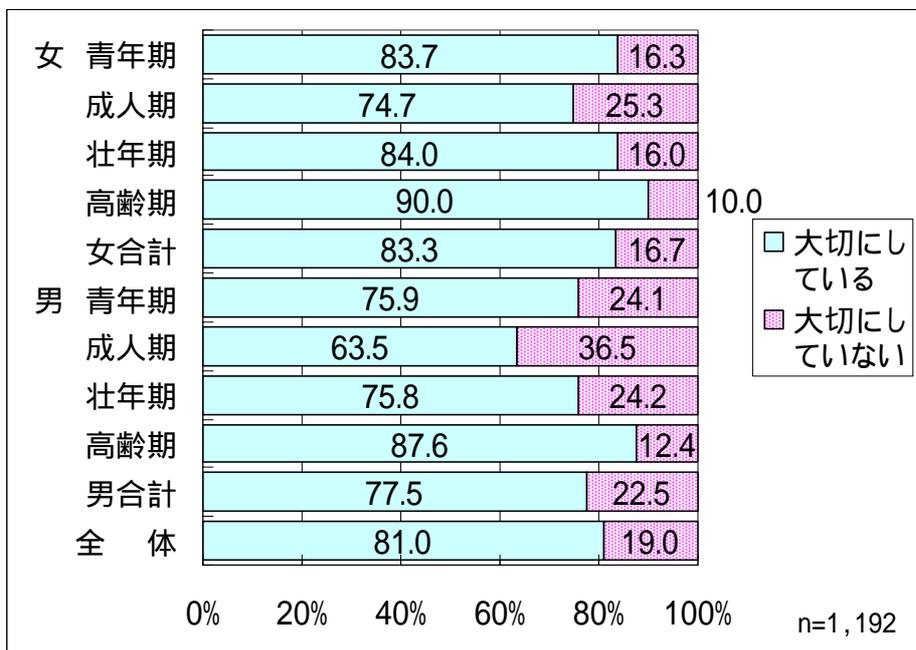
何か1つでも農酪漁業など食育に関する体験をしている人の割合は、16歳未満で 76.6%、16歳以上で 82.7%です。



性・ライフステージ別では、女性の高齢期、男性の壮年期・高齢期で割合が低くなっています。

指標 14 食文化を大切にしている人が増える

L. 行事食を大切にしている人の割合（16歳以上）

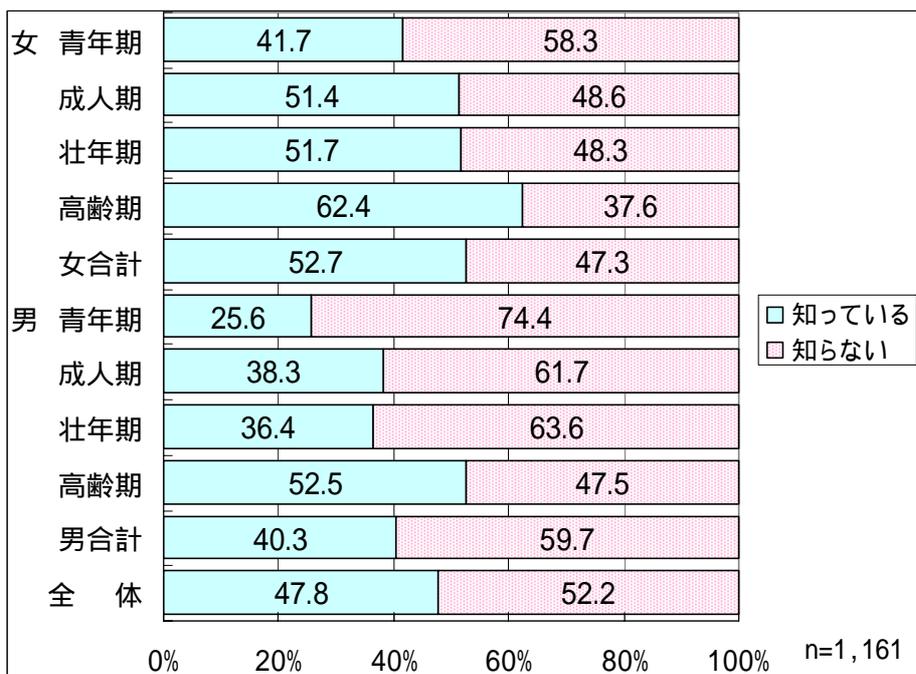


行事食を大切にしている人の割合は、全体の81.0%です。なお、性・ライフステージ別では女性の成人期、男性の青年期・成人期・壮年期で「大切にしている」割合が低くなっています。

「5つの食べる」を推進するために（食育推進運動の展開）

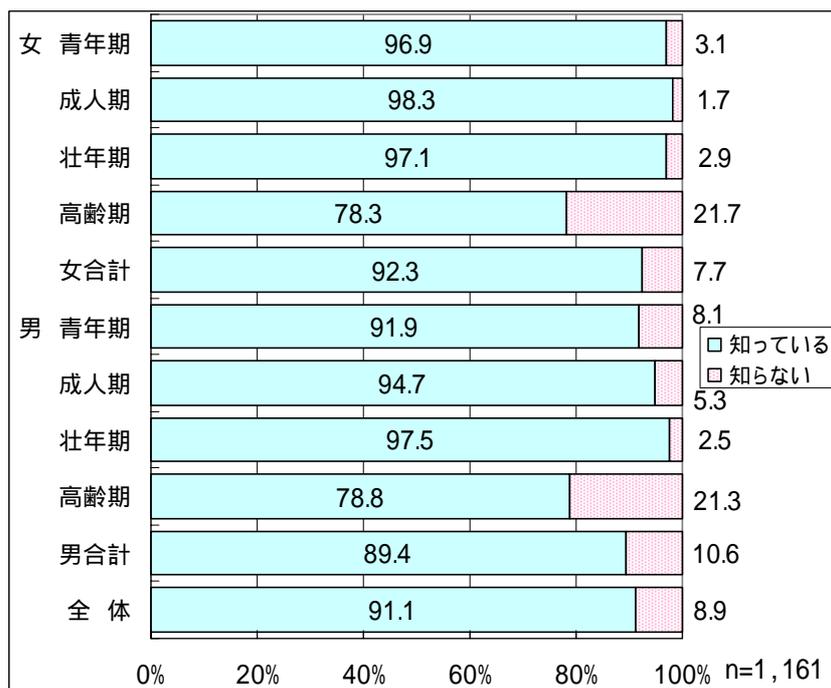
指標 17 食育推進に関わる言葉を知っている人が増える

M. 食事バランスガイドの言葉を知っている人の割合



食事バランスガイドの言葉を知っている人の割合は、全体の47.8%です。性・ライフステージ別では、女性の青年期・成人期、壮年期、男性では青年期・成人期・壮年期の割合が低くなっています。

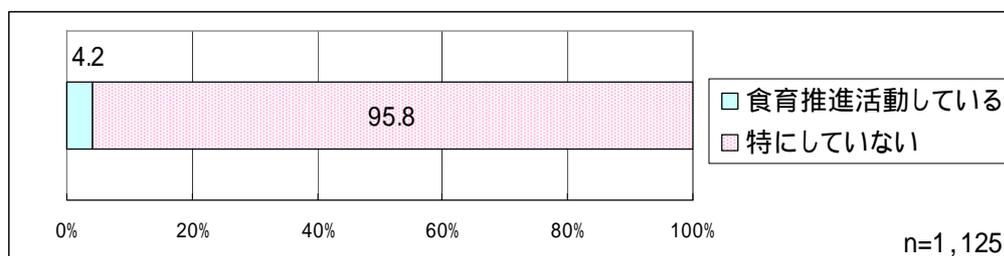
N. メタボリックシンドロームの言葉を知っている人の割合



メタボリックシンドロームの言葉を知っている人の割合は、全体の91.1%です。
性・ライフステージ別では、男女とも高齢期が低くなっています。

指標 18 食育推進に関わる活動をしている人が増える

0. 食育推進に関わる活動を何か一つでもしている人の割合



現在、食育推進に関わる活動をしている人は、全体の4.2%です。



食料自給率等の状況について

食料自給率は年々減少しています。これは輸入食品の増加や輸入への依存を意味します。しかしながら、食育の取り組みの一つである「地産地消」を進めることで、新鮮な食材（食品）を提供、また食べることができ、地元の農業振興も図れるだけでなく、運搬に伴うエネルギー（フードマイレージ）消費を少なくすることによる環境負荷の軽減ができます。そしてその結果、食料自給率も高くなっていくことが考えられます。

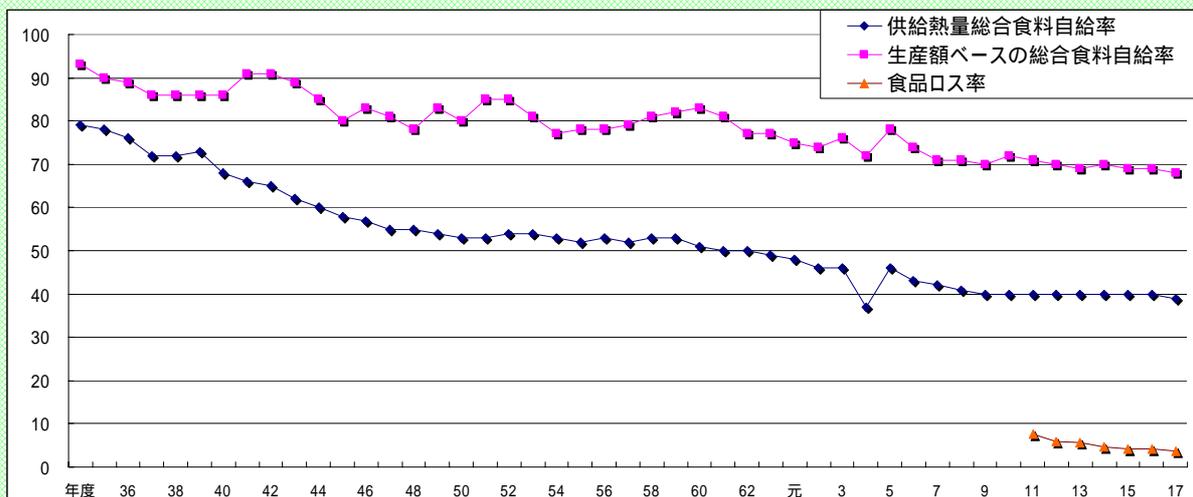
- ・ 熱量ベースでの食料自給率 昭和 40 年度：73% 平成 18 年度：39%
- ・ 生産額ベースでの食料自給率 昭和 40 年度：86% 平成 18 年度：68%

一方、世帯における食材の廃棄や料理の食べ残し（食品ロス率）に関しては、年々わずかながら減少しており、平成 12 年度は 7.7%であったものが、平成 17 年度は 4.1%、平成 18 年度には 3.7%となっています。（「食べ残し」のみについては、平成 18 年度は 1.1%。）

世帯の態様別では一人暮らしの食品ロス率が最も高く、平成 18 年度で 6.4%となっています。食べ残しの理由は、「量が多かった」が 72.8%と高く、その他「食事を取らなかった家族がいた」「嫌いなものが含まれていた」「体調不良だった」などが多く答えられていた理由でした。

これらの改善のためには、食への感謝の気持ち、そして「もったいない」の気持ちを忘れないことが何より大切です。

食料自給率などの状況



外食産業における食べ残しの量（全体に対する割合・平成 18 年度）は・・・

食堂・レストラン	3.1%
結婚披露宴	22.5%
宴会	15.2%
宿泊施設	13.0%

（参考：農林水産省 食料自給率レポート、食品ロス統計調査）